11th SHACHIHATA
New Product Design Competition
シャチハタ・ニュープロダクト・デザイン・コンペティション
受賞作品集

ごあいさつ
Greeting

シヤチハタ・ニュープロダクト・デザイン・コンペティション（SNDC）は、
10年の充電期間を経て、今年再開しました。
テーマは「しるしの価値」。
シヤチハタの原点ともいうべき「しるし」の現代における在り方や
未来に向けた可能性を、世の中に問い、共に考えたいと思ったのです。
長いブランクがあったにもかかわらず、応募総数は718点にのぼり、
デジタル化を含め時代の変化を捉えた多岐にわたる提案をいただきました。
独創的なアイデアも多く、大きな刺激を受けるとともに、
アイデンティティを示す「しるし」の奥深さを感じた、大変手応えのある
コンペティションでした。応募者の皆様に心より感謝申し上げます。

コンペ概要

応募受付期間
2018年4月1日（日）――5月31日（木）

テーマ
「しるしの価値」
自分であることの「しるし」（アイデンティティ）を表す
ためのプロダクトもしくは、仕組み。

賞
グランプリ1作品（賞金300万円）
準グランプリ2作品（賞金50万円）
審査員賞5作品（賞金20万円）
特別審査員賞3作品（賞金20万円）

審査員
喜多俊之、後藤陽次郎、中村勇吾、原研哉、深澤直人

特別審査員
舟橋正剛（一般社団法人未来ものづくり振興会 代表理事、
シヤチハタ株式会社 代表取締役社長）
岩渕貞哉（『美術手帖』編集長）

主催｜一般社団法人未来ものづくり振興会
共催｜株式会社美術出版社
特別協賛｜シヤチハタ株式会社

審査員

喜多俊之 Toshiyuki Kita
プロダクトデザイナー
喜多俊之デザイン研究所 代表

今年の応募作は過去のSNDCには見られなかったテクノロジーの要素が加わり、10年間の時代の変化を反映していたと思う。また「しるし」というテーマに対し、さすが印鑑の国と感心するような、判子の大切さに思いを込めた作品が多く見受けられ嬉しく感じた。特に最終審査に残った作品は、パーソナルなプロダクトに必要なこだわりが強く伝わってきて、心惹かれるものが複数あった。次回もローテクとハイテク両方からのアプローチを期待しているが、今年の受賞作や講評にとらわれず、ぜひまっさらな気持ちで果敢に挑戦してほしい。

後藤陽次郎 Yohjiro Gotoh
デザインプロデューサー
デザインインデックス 代表

久々にどんな作品が集まるか楽しみにしていたが、まず700を超える応募点数に驚いた。作品の傾向としては、すぐに商品化できそうな非常に実用的なものと、未来のさらなるデジタル化を見据えた実験的提案と、2手に分かれていたように思う。モノがあふれている昨今の世の中にあっても、視点を変えればアナログでも開発の余地はまだ十分ある。そんな可能性を実感したコンペだった。アイデンティティはこの先も重要なテーマになるだろうが、自分を表すものは何かを考えながら、同時に暮らしが楽しく豊かになるようなアイデアを追求してほしい。

中村勇吾 Yugo Nakamura
インターフェースデザイナー
tha ltd. 代表

「しるし」を判子と捉えるとテーマがかなり限定されるので、どこまで成立するのか懸念していたが、予想外に広がりがあり大変興味深かった。自分という情報をいかに物質化するか、もしくは物質から人はいかに情報を引き出すか。その観点から多くのアイデアが寄せられ、それぞれによく考えられていたと思う。提案を通じて自分の中でも物質と情報の関係が整理された。SNDC再開にあたり基本的な方向性は見えたと思うので、次回はもっと物質と情報それぞれの魅力を高め、相乗効果を生み出していくことを念頭に取り組んでいただくとよいだろう。

原研哉 Kenya Hara
グラフィックデザイナー
日本デザインセンター 代表

インターフェースの専門知識を持つ中村さんが審査員に加わり、応募者も技術的な状況や社会の新しいつながりを銘々咀嚼したのだろう。全般に見ごたえがあった。個人をしるす、あるいはしるしをつくるということが、社会で果たす役割を突き詰めて考えていくと、単に印鑑だけではないさまざまなファンクションがあることに気づく。そこに集中することで、新しいプロダクトやサービスが生まれるのではないかという思いを強く持った。SNDCの面白さだけでなく、コンペ自体の成長や深まりも感じたので、この10年間は必要なブランクだったと思う。

深澤直人 Naoto Fukasawa
プロダクトデザイナー
NAOTO FUKASAWA DESIGN 代表

人間が自分をしるすとはどういうことか。応募者と一緒に自分自身も考える、いいきっかけになった。難しい課題だったにもかかわらず、全体にレベルが高く、そうか、これもしるすということか、と気づかされるようなアイデアが少なからずあった。その中でも個人賞の作品は、ともすれば社会の中で紛れてしまう印鑑に口紅の色で個性を与えた、情緒的で美しい回答だと思う。「しるす」は引き続き考えていくべきテーマであり、次代に対し私たちはどうすればいいのか問い続けていくことに、このコンペの意味があるのではないだろうか。

グランプリ

自己QR

清水邦重
Kunishige Shimizu

QRコードを読み取ることで自己PRができる印鑑。自分のホームページやSNSのサイトなど好きな内容を表示できるアプリを開発し、ダウンロードして印影にスマホをかざせばその情報が見られる。初対面の自己紹介にも楽しく使える新たなコミュニケーションの提案。

「デジタルなものと捉えがちなQRコードを、フィジカルな物体として提示した秀作。アイデンティティをスタンプとしてしるすというアクションの中に多くの気づきがあった。現実の中に具現化していく未来のリアリティを見事に掬い取っている」（原）「デジタルだが判子の印面に似ているQRコードの特徴に着眼した力作。デジタルとアナログがうまく融合している」（深澤）「ホルダーのデザインは検討の余地があるものの、上下がわかり均一の印圧で押せるよう考えられており、アイキャッチになる形という点では面白い」（喜多）

準グランプリ

世界に
ただひとつの印鑑

明間大樹
Daiki Akema

一人ひとり異なる握り方の違いを印鑑に刻み込む仕組みの提案。3Dスキャナーと加工機器を組み合わせ、材質も樹脂や木材、金属などから選択し、自分だけの印鑑をつくることができる。完成した印鑑の凹凸は、自分だけにフィットする「しるし」になる。

「大事な印鑑を、自分の持ち方のクセをかたどり、自分だけの特別なものに仕上げていくところに魅力を感じた。デジタル・ファブリケーションを活かした、今の時代らしいアイデア」（中村）
「実際にあったら欲しいと思った作品のひとつ。自分だけのものとして、プロダクトに大切な愛着を持って使えるところがよい」（喜多）

準グランプリ

AIR SIGN

青柳祥生
Yoshiki Aoyagi

文字を「空で書く」電子サインデバイス。空間上に書かれたサイン軌道の座標やストロークの速度を読み取る機能を搭載。平面の動きに奥行きが加わる分複雑な軌道になり、さらに指紋認証機能も付加することで、偽装や模倣のリスクが減りサインの真正性が高まる。

「空中で文字を書き、三次元のものとして記録に残すという着想がユニーク。特にひらがなのように曲線でできた文字が、形として新しいシグネチャーになるのは面白いと思う」（原）
「発想がおもしろい。随分変わった形だなと思ったが、持ってみるとしっくりきた」（中村）

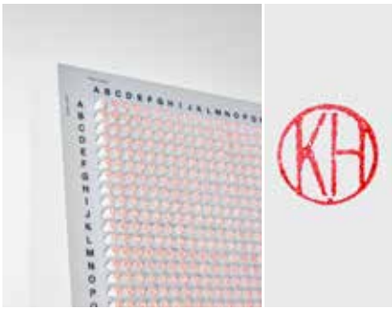
審査員賞

喜多賞
イニシャル三文判

堀川卓哉
Takuya Horikawa

外国人には名前を表す簡易印鑑や認印がなく、日本での生活で不自由を強いられていることに着想を得た。イニシャルであれば外国人でも印鑑で表すことができる。アルファベット26字×26字＝676種類であらゆる名前に対応。

「西洋でも印鑑文化が普及する可能性を秘めた提案。676種類すべてを試作したことも説得力につながった」（喜多）



後藤賞
印星（いんしょう）

佐々木晴美　坂口杏奈
Harumi Sasaki　Anna Sakaguchi

星のような形状の6つの飛び出した部分に、それぞれ違うデザインの名前が刻まれた判子。同じ名前でも、TPOや気分に合わせて好きな印象のものを選んで押すことで、「こうありたい」と思う自分を、印すことができる。

「楽しく使えて、しかも機能的。フォルムも美しい。プレーン、シンプル、ユースフルの三拍子揃った作品」（後藤）

中村賞
360° Stamp

山口真五
Shingo Yamaguchi

押印した人物を特定できるカメラ付きの印鑑。押印の瞬間を360°カメラで撮影することで、間違いなく本人の意思で押されたことを証明できる。押印した人物・書類・場所（GPS情報）・状況・日時などを画像データとして記録し、クラウド上に保存することも可能。

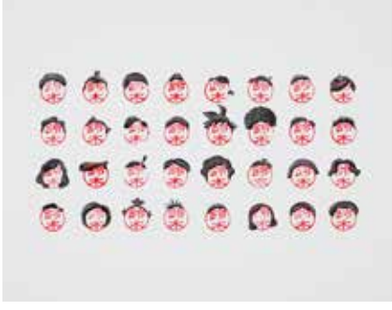
「ドライブレコーダーのように証拠保全できる実用性を高く評価した。もっと判子然としているとさらによい」（中村）

原賞
Wig

服部隼弥　那須裕樹
Shunya Hattori　Hiroki Nasu
（design studio Bouillon）

三文判にかぶせて押すだけで楽しめる遊び印。「名は体を表す」のことわざさながらに、名前の印面を顔に見立て、にじみ出る個性を髪型のアイコンで視覚化した。ありのままの自分を表現するもよし、冒険するもよし、印鑑を押すシーンを楽しく演出するコミュニケーションツール。

「アイデンティティとはいえない三文判にいたずらを加えて個性化するという、パーソナライズの仕方が秀逸」（原）



深澤賞
LIP COLOR INK

望月未来
Miki Mochizuki

ネーム印やスタンプ台での使用を想定した、口紅の色がモチーフのインキシリーズ。色によって多様な雰囲気を演出できる口紅の特性に着眼した。自分らしい色、好きな色で捺された印には、その人のアイデンティティがより強く現れる。

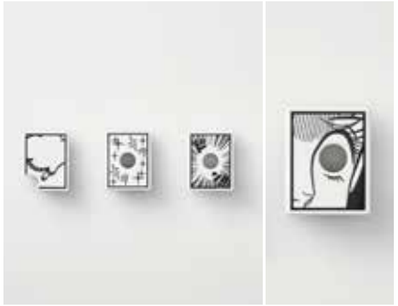
「口紅の色は女性にとってのアイデンティティという、日々に漂う色気に気づきを与える作品」（深澤）

特別審査員賞
ハンコマ！

榊原伸一
Shinichi Sakakibara

マンガの1コマをモチーフにしたドラマチックなスタンプ。空いている部分に印鑑をはめ込み一緒に捺印すると、あたかもマンガの主人公のように、名前が意思や感情を持った生き物へと変化。そこに生命が吹き込まれ、自分の「しるし」になる。

「名前にメッセージがつくだけで楽しいしるしになり、コミュニケーションの手段として遊び心がある」（岩渕）



特別審査員賞
Name Pen Brush

竹中隆雄
Takao Takenaka

篆刻の浸透印付き筆ペン。筆文字に篆刻印を押すと文字が美しく見え、書き手の「しるし」を添えることにより気持ちも伝わりやすい。筆ペンが日本土産として外国人に人気があることから、グローバル市場やインバウンド市場での需要も期待できる。

「当たり前すぎて思いつかなかった、盲点を突いた作品。筆ペンと篆刻印の組み合わせが素晴らしい」（舟橋）

特別審査員賞
印影

米田隆浩
Takahiro Yoneda

捺印した跡（印影）に影をつけた印字の判子。文字を縁取る影は、そこに光が当たっている証。一人ひとりにスポットライトを当てるように、固有の「しるし」がアイデンティティを際立たせ、従来の印字にはない存在感をもたらす。

「印影のある判子はありそうでなかった。立体感のある印字も美しく、あれば欲しいと思う現実的な提案」（後藤）

デザイン　株式会社日本デザインセンター
執筆　杉瀬由希
撮影　池ノ谷侑花（ゆかい）※P1･2
　　株式会社日本デザインセンター ※P3～6
制作　株式会社美術出版社
印刷･製本　シナノ印刷株式会社
発行　一般社団法人未来ものづくり振興会
発行日　2018年10月12日